特255
145

濱本 浩 著

# 戀の決死隊

滿蒙獨立の秘話

三十分で讀切れます

第百書房發行

始

特 255
145

濱本浩著

# 戀の決死隊

第百書房版

帝國圖書館藏

# 戀の決死隊

目次

爆彈のスウッ・ケエス
故郷の娘
俄か夫婦
まぼろし
死の進軍
戀を斬る

# 戀の決死隊

## 爆彈のスウッ・ケエス

渾なき雪原の一角に、蜃氣樓のやうな灰色の町が現はれて來た。

雪をあびて聳へた寺院の尖塔が、風にさらされたアカシヤの並木が――そして列車は、伊藤博文の暗殺されたハルビン驛のプラットホームに、するゝと辷りこんだ。

世界大戦の第二年目、一九一五年十一月のある午後であつた。

前部の一等車には、退役騎兵大尉大山幹雄氏の一行八人が乘つて居た。

一行の中で、いちばん年少の本居辰夫君は、スチームに曇つた窓硝子に、ぴつたりと顏を押しつけて、熱心に外の景色を眺めて居たが、

『何だか外國へ來たやうだなあ。』

と、嬉しさうに欣々した。

眞赤な外套の若い女が、窓とすれ〳〵に覗いて行つた。青い眼が、本居君の頰をちらつと掠めた。

『辰ちやん、變なものを見て居ないで、鞄を下さないかい。』

年長の大村武夫君は窘めるやうに云ひながら、自分は靴の儘で座席に上つて、網棚の上のツスウ・ケエスを下さうとして居た。

一年志願の豫備步兵少尉だつた大村君は、大連で買つた支那服を溺れるやうに着込んでゐた。

『二十五個、これでいゝんだね。』

『落すなッ！』

隊長の大山大尉が、左の頰に深い皺を刻んで棚を見上げてゐた。

『落して見るがよい、この列車なんか木葉微塵だ。』

東支鐵道のハイラルから、南へ百二十哩ほど離れ、興安嶺からバイカル湖にそゝぐハラハ河の岸で、兵馬を練つて滿蒙獨立の計畫を進めて居たバブチヤツブ將軍を、ふとしたことから日本志士の一團が援助することになつた。

退役騎兵大尉、大山幹雄氏が隊長で、あとは豫後備の將校下士六名であつたが、この人達は大部分支那の第二次革命に參加して居たので、その緣故から彈藥銃器の供給と軍事行動の指導を引き受けたのであつた。

第一着に、大連からハルビンまで、可成りの彈藥を輸送することであつた。

滿鐵は何うにか通過するとしても、途中で長春からは露西亞の管轄となる。それも長春の露西亞官憲を何うやら誤魔かして、やつとのことでハルビンまで持ち込むことができた。

今、その汽車が着いたのだ、一同の顏には、あり〳〵と安心の色が浮んだ。

然し、その安心は束の間に破れた。

プラットホームには、露西亞の憲兵が、一行と荷物を待ち受けて居たのだつた。

『これには何が入つて居る？』

憲兵は軍刀の鞘で、スーツ・ケースをつゝきながら不審さうに訊ねた。

同志の一人、若林龍雄君は後備歩兵中尉で、日露戰爭のとき、ハイラルを中心に、特別任務を帶びて活躍して居たので、露西亞語は巧みに話せた。

『雜貨です。』

若林君は、葉卷の灰を落しながら無雜作に答へた。

『じやあ、開けて見せ給へ。』

憲兵は、凝と見詰めて居た。

『領事館の荷物だから、領事の許可がなければ見せるわけにはいかぬ。』

大山氏が、危險と見て助言した。

『では一應、諸君も荷物と一緒に憲兵隊まで來て下さい。その上で、隊から領事館へは話をします。』

憲兵は、頑强にさう云ひ張つた。

『面倒なことになつたなあ。』

當惑の色が一同の顏に動いた。然し、隊長が何とか解決はするだらう、と大山氏への信賴を忘れなかつた。

驛前には、人相の惡いロシア人の馭者が、ずらりと馬橇を並べて居た。

『日本の停車場にも倉屋が群がつてゐる。似て居るぢやないか。』

若林君は、不安よりも何よりも物珍らしさでいつぱいだつた。

その馬橇に分乘して、憲兵に護られながら雪の中を憲兵隊に急いだ。

『これが領事館に知れたら、却て面倒になるかも知れない。』

大山氏は橇の上で考へた。

『領事には知らさず、解決したいものだ。』

憲兵隊の一室であつた。

壁のペチカが赤々と燃えてゐた。

痩せた狼のやうな隊長が威嚴を見せて入つて來たが、大山氏がにこ〳〵して居たので拍子わるさうに腰を下した。

『若林君、僕の云ふとほりに話してくれ。』

大山氏が何を云ふのか、みんな耳を立てた。大山氏は一語々々、句切つて、

『實は、この中は、みんな彈藥です。』

隊長も同志も異つた意味ではつとなつた。

『露西亞は現在獨逸と交戰中です。だから、此の彈藥を露西亞政府に買つて貰つて一儲けしやうと遙々大連から持つて來ました。何にしても、鐵道輸送規程を犯した罪は免れません。それで、その償ひに、この彈藥全部を貴國の陸軍に寄附致しませう。』

さう云ひ終ると、大山氏はぽつとしたやうにポケットから煙草を出して火をつけた。

憲兵隊長は勢ひよく立つた。何をするかと一同はつとなつたが、

『ザアの名に依つて厚く御禮を申のべます。』

と云つて、勢ひよく手を差し出して、大山氏に握手を求めた。

『隊長、お願ひがあります。』

大山氏が、隙さずに云つた。

『私達の旅行用具だけは戴いて參りますよ。これです、何なら内容を御覧に入れませうか。』

さう云つて、小型の鞄を抜きとると、わざと手荒くテーブルの上に叩きつけた。

『いゝです、いゝです、見なくともよろしい。』

見掛けによらず好人物らしい隊長は、相構をくづしてあわてゝ押し留めた。

ボレワヤ街の東洋館は、その頃のハルビンでは一流の日本旅館で、美しい女中が揃つて居るので有名だつたが、そこが一行の根據地であつた。

床の間に松の盆栽を飾つた日本座敷に、くつろいでから、大山氏は憲兵隊から持ち出して來た二個のスーツケースを開いてゐた。中には手榴彈と、その雷管が、綿に包まれて、きつしりと詰つてゐたのだつた。

# 故郷の娘

太豆や凍魚を積んだ馬橇が、續々とスンガリーの岸を下つて來る冬は、ハルビンの一年中で一番賑かな樂しいシーズンであつた。

クリスマスから春のバスハまでは、上海や大連あたりに散らばつて居る露西亞人が、故郷へ歸る心でハルビンに歸つて來た。

スンガリーの上流から、興安嶺の麓から、毛皮の外套を重さうに着た男達が、犇めきながらハルビン驛のプラットホームを踏んだ。

キタイスカヤ街の店といふ店は、意匠を凝らして窓を飾り立てた。

パリー流行の婦人服やニューヨーク製の帽子や、寶石の首飾がきらびやかに人目を惹いてゐた。

キヤバレーは曉方近くまで賑つて居た。家の中にはペチカが唸りをあげて燃え、窓々から漏れる電燈の光で、街に降る雪が羽毛のやうに光つて居た。

ハルビンには媚を賣る各國の女がゐた。

プテワヤ街の娼家には、支那人や朝鮮人の中に混つて、日本女ばかりの店もあつた。

平戸屋も、その一軒であつた。平戸屋には五人の日本娘が居た。

ハルビンくんだりまで出稼ぎして居る女だからといつて、散々その道で苦勞した流轉の女とは限つて居なかつた。

それに誘拐團の手に掛つて、行李詰めで送られて來たものでも決してなかつた。

北九州の島や海岸の町では、結婚前には一度洋行するものだと云はれてゐるほどで、滿洲やシベリアへ、自ら進んで肉體を資本に出稼ぎしては、うんと貯めこんで晴れの歸鄉をする習慣さへあつた。

まるで處女で來て、最初の男が、興安嶺の麓から來た髯面の露西亞人だつたりすることも珍らしくはなかつた。

折角持ち込んだ彈丸を、すつかり露西亞憲兵隊へ提供してしまつた大山氏の一行は、改めて長春方面で彈藥を調達した上でなければ、外蒙古のバプチャップの陣營に乘り込むわけにはゆかなかつた。

それで隊長の大山氏は、單身、長春から大連方面へ彈藥と軍資金の調達にでかけて行つた。

隊長の留守中、若い同志達は、心からハルビンのシーズンを享樂し、いつしか、銘々が平戸屋の女達と勝手に馴染みを重ねて居た。

今日あつて明日ない命だ、――それに何人もかれも、はちきれるやうな體力をもつて居た。酒と女と戰爭、それ以外の生活には興味のもてない青年達であつた。

女達はまた、同じ血肉の日本人を、殊に若さと情熱に燃えた彼等を、客としてゞはなく戀人として待遇して居る。

本居辰夫君は仲間で最年少の二十二歳だつた。

本居君が何うして此の一行に加はつたかは大山隊長以外にその理由を知らなかつた。

東京を立つて以來、もつとも親しくして來た大村君にすら、本居君は過去を語ることを避けて居た。

同志がプテワヤ街へ夜の冒險にでかけるときでも、本居君は一人で別の行動をとつた。何をしてゐるのか、だれも知らなかつたが、一人歩きから歸つて來ては、

『君、トロイカつて何んな馬車だね。』

などゝ、青年らしい質問をしたりした。

ある朝、平戸屋に泊つて歸つた大村君が、

『素晴らしいニュースだが聞きたくないかい。』

にや〳〵と笑つて、

『君の故郷から昨日着いたといふ娘が居るんだ、素晴らしいシャンだぜ、それに正眞正銘のバージンださうだ、何うだ行つて見ないか。』

と云つた。

『それも淫賣婦志願か。』

いつになく、本居君が話に乘つて來た。

『勿論さうよ。』

大村君はこともなげに答へた。

本居君の故郷は、九州佐賀市から一里ほどはなれた村であつた。

土地では勝烏と呼ぶ鵲があわただしく飛び交ふ桑畑と、紺の香の新しい久留米絣の健康さうな娘を、幾人も腦裡に浮べて、

『何となく不愉快だな。』

さう云つて苦い顔をした。

それを、どう勸めたものか、遂々大村君は本居君を連れて、平戸屋のドアを押した。

本居君は、女と差し向ひになつてみると、意氣地のないほど含羞んでしまつた。

引込みがつかないので、矢鱈に煙草を吹かしながら、盜むやうに女の横顔を見て居た。

「いゝ横顔だなあ」――本居君は心から感心した。神經質に迫つた顔ではあつたが、劍のない鼻と、眞直ぐに切りさげたやうな顎が、顔全體と調和して彫刻的に見えた。

『君の名何と云ふの？。』

本居君が沈默に堪えられなくつて切り出した。

『須磨子――でもほんたうの名ぢやありませんわ』

案外素直に答へたが、

『鄕里は佐賀縣だつて、佐賀の何處だね。』

『戸籍調べなんか止してよ。それとも、あんた憲兵さん。』

話が途切れると、須磨子は本居君のコップで、ぐいぐゝと立て續けにビールをあほつた。

『止せよ、飲みたくもなささうぢやないか。』

本居君が見兼ねてコップをもぎとつた。

『構はないで下さい、別に御迷惑はかけませんからね。』

須磨子はだらしなく鼻聲になつた。

醉つても湖のやうに澄んだ瞳を正面から本居君にそゝいで、荒つぽく酒臭い息を吐いた。

何が處女だ！　何が初心だ、安つぽい狂言は止してくれ――本居君は、もてあまして、苦りきつて席を立つた。

翌日は、珍らしく、からつと霽れて、思ひなしか風さへも朗かに吹いて居た。

平戸屋の須磨子が本居君の下宿を訪ねて來たのである。

須磨子は和服の上に、露西亞人のやうな茶色の外套を着てゐた。

本居君は意外ではあつたが、別に惡い氣はしなかつた。それで誘はれるまゝに外出の支度をしたのである。

驛の前から、外人街の新市街に出て、町端れの日本人墓地の方へ、二人は歩いて行つた。

途中で、本居君が馬車を呼び止めやうとするのを、

『二人きりで歩きませうよ。』

さう云つて須磨子は遮つた。

二人は前の夜の事には一言も觸れなかつた。故郷の話は須磨子の方で避けるやうに見えた。結局は、默々として、氷結した道を歩いた。何うかして、お互の手先が觸れさうになると、二人一緒にさつと手を引いた。

郊外の、とある丘の上に白樺に圍まれた小さな亭があつた。須磨子は、ベンチに腰を下すと、

『お腹がすいたでせう。』

と云つた。本居君は時計を出して見た。十二時三十分であつた。

『どつか料理店に行かう、何を食べるかね、』

對手が商賣婦だからといふ心遣ひから相當の料理店を心の中で物色したが本居君には心當りがなかつた。

『そんなこと無駄よ、あたし斯麼もの持て來たんですけれど。』

紙包の中から、海苔卷と福神漬の罐詰を出して、

『お茶がないわねえ、でも我慢できて？』

と云つた。

二人はまた歩いた。話もなく默々として歩いた。支那人街のブーチヤテンを抜けて、ス

ンガリーの岸に出た。

暮れ易い冬の日は、鈍色の隈を見せて、遠い雪原の彼方に落ちた。

『どこまでも、どこまでも行つて行たいわね。』

須磨子がうつとりと夕陽に對して云つた。

それぢやあカチユーシヤだ、曠野の雪原をとぼ〳〵歩む須磨子がカチユーシヤなら、僕はネフルユードフだ――本居君は松井須磨子のカチユーシヤを聯想し、スンガリーに落る夕影を眺めながら、昔覺えたカチユーシヤの唄を口笛で吹いた。

二人は戀に陷らうとしてゐる――本居君は瞭りと考へた。

あの日以來、絶えず自分の心で占めて居るのは須磨子の面影である。樂しかつた、半日の散歩を想ふと、外のことは何も彼も興味がなく、時には食慾さへ失ふことがあつた。

「金で買ふべき女と金を離れて結ばれる」事が、果して幸福であらうか何うかも考へた。

殊に自分は、死地に向ふ戰士である。ほんとうに須磨子を愛するなら、默つて離れるのが道ではあるまいか、なまじか危い火遊びをして怪俄人を出すでもあるまい、離れやう、今のうちに離れやう、何處ことがあつても二度と會ふまい、それが女の眞心に對する、せめてもの禮心である、と本居君は決心した。

## 俄か夫婦

東支鐵道で、ハルビンから凍結したスンガリーを渡つて、チチハルの平野を北西に過ぎると興安嶺の雪に閉された白樺、落葉松の密林帶に入るのである。

山の斜面に、色彩の美しい露西亞風の市街が現はれ、寺院の鐘が窓を掠めたりする。

興安嶺の大隧道を拔け、白樺の林に包まれたキンアンの驛を過ぎてから、汽車は驀地にハイラルの草原へと駈け下りるのであつた。

ハイラルは外蒙古ホロンバイルの中心都市で市街はイミンゴールの左岸に立ち、鐵道から北には露西亞人が、南には東洋人の市街があつた。

五十名に近い日本人の、多くは賣娼婦と、これに寄生する人達で、殘りの數名が商人と醫者であつた。

大山氏部下の若林中尉が、平戸屋のお玉をつれて、ハイラルのプラットホームに下車したのは一九一六年の二月だ。

若林龍雄君は日露役當時、支那人に假裝してハイラルを中心に活躍して居たので、この附近の事情には明るく、そしてロシア語も相當に話せた。

平戸屋のお玉は、ハルビンの娼婦の中では古顔の方で、これも露西亞語の會話なら、通譯ぐらひはできると云ふのが自慢だつた。

二人は馬車の馭者からきいて舊市街の、日本人經營の料理兼旅館に一先づ落付いた。

『長春で雜貨屋をやつて居たんですが、あのあたりは排日が烈しくて危險を感じた。やくざな店でしたが二束三文に叩き賣つて、命からがら夫婦で逃げて來たのです、これから一つ繩張を分けていたゞいて何かやりますよ。』

若林君は、まことしやかに、宿の亭主に話した。

『私は以前から考へて居たのだが、蒙古の奥地を相手に蠟燭とマッチの卸賣をやつて御覽なさい、屹度當てますよ。』

亭主が親切に敎へてくれた。

『そいつは面白い、實はその方なら經驗がありますし、長春の工場といつでも取引きができるんです、早速初めますかな。』

さういふ事になつて、一週間目、借切の貨物列車で、どつさりマッチ、蠟燭の箱が到着した。

それから數日して、また仲間の一人が俄か仕立ての女房を連れてハイラルに來た。これも長春から若林夫婦をたよつて來たのだと云つて、罐詰、味噌など食料品の小賣店を開

業した。

さういふわけで、ハルビンに機會を待つて居た同志の一行は、年の春から新春へかけ、だれもかれも、俄か仕立ての女房をつれてハイラルに移住して來たのであつた。

その人達の店へ、長春や大連から送りつけて來る商品の箱には、どの箱にも必ず中心には彈藥が隱されて居た。

マッチの箱の底に、火藥や雷管が詰つてゐたり、味噌の樽は半分から下が彈藥であらうなど、今度こそは流石の露西亞の官憲も氣付かなかつたであらう。

春が來た。

スンガリーの氷が緩んで、塘の楊柳が粉のやうに煙る頃、本居辰夫君は後殿になつてハルビンを立つた。

本居君の傍には、南方の準備を完ふして引き揚げて行く、大山隊長が、嚴格な顏をして附き添つて居た。

本居君は流石に感慨があつた。二度と相見ぬ決心をした女ではあつたが、汽車がハルビンの驛を離れる間際まで、蔭ながら見送つてくれるであらう須磨子を幾度も幾度も搜したが遂に女の姿は見られなかつた。

本居君は失望した、だが、何となく肩の重荷が下りたやうな氣もしたのであつた。

ハイラルでは、若い同志達が、流石にお互の俄か女房を、大山隊長に見られることを恥ぢて居た。それに、一同がハイラルを去つて、南方のハラハへ移動する準備もすつかり整つて居たので何れは別れるべき俄妻であつた。隊長の到着前に、女達はハルビンに歸ることにしたが、流石に淡々とは別れかねた。

男達は、身につけて居た金の全部を女達に渡し、ハルビンに歸つたら、この金で前借を拂つて、自由な體になるやうに、と云つた。

『そしてね、若し忘れなかつたら、花の咲く頃、郭家店で會ほうぜ。』

男達は沁りと言葉を足した。

『どんなことがあつても、屹度、郭家店で待つて居ますわ。でも――お骨になつて來てはいやですよ。』

女達は泣いて居た。

興安嶺の鈴蘭にはまだ早かつたが、南風がバスハの噂と野の花の匂を乘せて來る四月の初め、女達は袖を連ねて東へ去つた。

## まぼろし

ハイラルから南へ百二十哩離れて、ハラハ河畔のハラヘンゴロに、蒙古の將軍バブチヤツブは大山氏一行の來着を待ち兼ねてゐた。

見渡す限り茫々たる草原であつた。それでもところどころに砂丘があつて、山毛欅に似た疏林が圍んでゐた。

三千の蒙古軍はハラハ河の河床や丘の附近に露營をして居た。

將軍を始め士官に相當する者は各々移動するモンゴール・パオを持つてゐた。

モンゴール・パオは柳材を組み絨氈を張つて、麻綱で絡めた、椀を伏せたやうな蒙古の家であつた。

兵士達は、簡單なテントを張つて、凍結した雪の上に、着のみ着のまゝでごろ寢して居た。

月明の夜は、萬籟寂たる曠野の中に、白い陣屋が蜒々と照されて、幻のやうに見られた。

其處へ、大山氏以下七人の日本將校は、彈藥銃器の大行李を率ひて到着したのであつた。

バブチヤツブ將軍は四十二歳、まる〳〵と肥滿して居た。雪やけした頬には、いつでも

寛容の微笑があつた。

將軍が日本士官の一行を賓客として待遇するので、部下の將卒も、心からの敬意を以て服從して呉れた。

河床の草の中に、初めて紫の菫の花をみつけて若い人達がはしやいだ四月二十日、齋藤元宏、柳本賢太郎の兩君は、郵便物を受け取りにハイラルへ向つて出發した。

齋藤君は陸軍大學在學中の、同志中唯一の現役歩兵中尉で、利かぬ氣の友情に厚い青年であつた。

柳本君も同年の二十五歳で、同文書院の出身だつた。高知縣人らしい氣慨をもつて居た。

二人は道案内の蒙古兵をつれて、いそ〳〵と馬に跨つた。

春だ、春だ、女――の市街への旅は青年達の心をときめかした。

『よろしく云つて呉れろ。』

走馬燈のやうに幾人もの女を心に描きながら、宛のない傳言を吐鳴つた者もあつた。

『露西亞飴を頼むぞ。』

二人は馬上高く騎兵銃を擧げてこれに答へた。

それから數日後、一隊の蒙古人が、齋藤、柳本兩君の慘殺死體を馬の背に縛りつけて、ハラハの陣地に屆けて來た。

兩君の屍から血に濡れた服を脱がすと、二人ともハイラルで受けとつた手紙と紙幣を、確りと膚に結びつけて居た。

それに、腰に縛つた風呂敷包があつた。中から、土産の飴の罐が出て來たときには、流石の一同も涙を流した。

獰猛なソロンの土匪に襲はれて慘殺されたのを、通り掛つた牧羊者と協力して、死骸だけは奪ひとつて來たのだ、と同行の蒙古兵は怯へながら報告した。

これが最初の犠牲者だつた。

蒙古の六月は、花の季節である。梢には桃の紅、李の白、それにアカシヤの花もほろほろと散つた。

野には絢爛たる芍藥、匂の高い白百合、撒き散した壺菫が、ぎつしりと咲いて居た。

パプチヤツブ將軍麾下の三千騎は、遂々ハラハの陣地を離れて、野の花を馬蹄に蹂躙りつゝ滿蒙突破の大進軍を開始したのであつた。

第一挺隊の指揮官大村武夫少尉と、副官の本居辰夫君が先頭に馬首を並べて、全軍を敎導した。

ハラハ河畔を離れてから、東ウジユムジンに向ひ、幾日も花野の中を一直線に南下するのであつた。

指揮官の大村少尉は、朝から晩まで、同じ唄をうたひながら馬を進めた。

その頃はやつたさゝ節らしかつたが、それが礒節にも浪花節にも聞へた。この唄は、花の咲く頃、郭家店で會ほうと約束してハイラルで別れた女の形身だつた。

それで無茶苦茶に唄つてさへ居れば大村君は樂しさうだつた。

それを知つて居たので本居君は、揶揄ふつもりで、話しかけた。

『大村少尉殿、郭家店へは一體いつ着くんだつたかなあ。』

『わかるものか、敵次第、戰爭次第じやないか、それとも彈丸に的つて見ろよ、一生涯着きつこはないじやないか。そんなこと訊いて何うするんだい。』

大村君は返事をすると、何う思つたのか唄をぴつたりやめた。

「そんなこと訊いて何うするんだい」――と大村君に云はれてみる、とやつと忘れかけて居た須磨子の問題が、むら〳〵と浮んで來た。

『見ろ、どいつも、こいつも、女に逢ふのをあんなに樂んでゐるじやないか、同じ樣に女達も今頃は郭家店に先き廻りして、毎日、丘の上に氣を揀りながら胸を躍らせてゐるに相違ない。』

自分は何うだ、自分よりも須磨子は何うだ、離れるのが女のために幸福だなど〻獨りぎ

めして、自分は女の立場から考へることを忘れてゐた。

須磨子にとつて、どの道が幸福であつたか、それは須磨子自身が知つてゐるのでこの自分に解る筈はなかつたのだ。――本居君は考へると行手が眞暗になつた。

『何うしたんだ、本居。』

大村少尉は驚いて馬を停めた。今まで元氣に話して居た本居君が、双眼鏡を握つて化石のやうに固くなつたからである。

二丁ほど前方の小高い丘に、友禪の裾模様を着た日本の娘が立つて居る。

『須磨子だ。』

大村少尉も双眼鏡を、眼に當てた。

『本居の女だ。』さう思つたのである。

本居君は、ぽんと馬の腹を蹴ると狂氣のやうに驅けだした。はつとして大村少尉がこれに續いた。

然し、それは初夏の斜陽が描きだした幻にすぎなかつた。

丘の上には、人さし招く白樺が一本、その裾に纏はるやうに、芍藥と鬼百合が棘になつて咲いて居たのであつた。

『俺までが確かに見たのだが。』

颯々と吹く夕風にはつとしながら、大村少尉は考へこんでしまつた。然し口では事もなげに、

『女に飢ゑると、何もかもが女に見えるんだな。』

と云つて、苦しさうに笑つた。

## 死の進軍

大興安嶺を東に越して、一望千里の茫々たる草原を進軍して數日目、洮南の西の突泉で

鄭家屯から遙々と來て蒙古軍を待つて居た、吳俊陞下の大軍と最初の遭遇戰を交へたのである。

吳將軍の新鋭兵が、大砲と機關銃を備へて突泉で待つて居やうなどゝは、蒙古軍は夢にも考へて居なかつた。

そして苦戰の結果、曾て東京に、大山氏を迎へに來た、統領のバター將軍初め百餘名の死傷者を出した。

若林中尉が、一行のパイロットとなつてハイラルでマツチ商を始めた、豪膽で快活だつた若林龍雄君は、敵の重圍に陷づて、縣衙門の正門に追ひ詰められた。

逃れる途がないと知ると、すらりと腰の日本刀を抜いて正眼に構へ、

『さあ來いつ！』

と氣合をかけた。その拍子に、何十發もの敵彈が、ばらぐゝと飛んで來て、軀中がまるで蜂の巣のやうになつて斃れた。

長春の南五十哩餘の郭家店は、滿鐵連長線沿線のカウリヤンと大豆の集散地に過ぎかつたが、日露戰爭の終りに、露軍總司令官リネウヰツチ大將の駐營地として歷史的には有名な町であつた。今でも町の郊外には、當時を語る露兵墓地が殘つてゐる。

市街は丘陵の斜面にあつて、停車場からだらだらと下りてゆくと、途中の南一條街には日本の料理店があり日本の醫者も居た。この町には百二三十名の日本人と、日本の守備隊が駐屯して居た。

疵だらけの蒙古軍が、氣息奄々と、郭家店西方の高地に到着したのは、花もすぎ、はや青葉の八月十三日だつた。

全軍の指導者であつた大山大尉は、突泉の戰後、發熱して重態に陷り、雄圖半ばにして大連の病院に送られた。

部下の若林、齋藤兩中尉、柳本通譯官は不幸敵彈に斃れるし、蒙古兵でもバター統領初

め數百名の死傷者を出してゐる。

それを、バブチャツブ將軍は隱忍して、郭家店まで押して來たのは、こゝに來さへすれば日本の駐屯軍からある程度の掩護を得られるであらうし、機關銃や大砲のこれまで缺乏してゐた武器を補給する便宜があると信じて居たからであつた。

丘の上から、下の市街に輝く日章旗を見付けたとき、蒙古兵は歡呼した。

日本人は誰も彼も蒙古軍の親友であるやうに考へて居た兵士達は、故鄉に歸つたやうに喜んだ。

然し、國家と國家の關係は到底個人的な尺度で計ることはできない。

國と國との關係は國民と國民との關係とは寧ろ反對の方向に進むべきルールも持てゐるやうでもあつた。

六月の初め、大總統の袁世凱が病死し、後任は親日派の黎元洪であつた。

從つて日本としては、今更、反政派の蒙古獨立軍を援助する理由はなかつたのである。

時の勢ひである。バブチャツブ將軍には總ての事情が朧げながら推察せられた。

郭家店の日本守備隊と、支那側との間には豫め協定があつた。

市民の安全を期するため市街地の周圍に、一定の緩衝地帶を設立して、蒙古軍は、その地域外に退去すべし　と日本守備隊長の要求があつた。

翌八月十四日　早朝を期して、疵だらけの蒙古軍は、折角到着した郭家店を離れて、五哩以外に退去しなければならない。

單に退去するだけならまだしもだが、緩衝地帶の外側には、新鋭の支那軍が、機關銃を揃へて蒙古兵を待つて居た。

國と國、民族と民族の問題の他に、ある人々にとつては、もつと重大な問題が殘されて居た。それは男と女との問題であつた。

# 戀を斬る

平戸屋の娼婦達は、ハイラルから歸つて間もなく、借金を整理して、郭家店に移つて來た。

自由なからだになると、中には內地に歸らうと云ふ者も、また大連あたりまで行つて、小さな商賣を始めてみやうと云ふものもあつたが、

『花の咲く頃、郭家店で逢ほう』と約束した男の言葉をたよりに、一先づ郭家店に來て、逢へるか逢へないか當にはならぬ男達を待つことにした。

その以前に、姐さん株のお玉は、自分達朋輩三人が賑かに興じながら、旅立の準備をするにつけても、傍で寂しさうに手傳つてくれる若い須磨子の心中を推察せぬわけにはゆかなかつた。



『あんた達、須磨ちやんを殘して行つて氣が咎めないと思ふ？　ねえ連れて行きませうよ』

お玉が云ひだして、皆が殘りの金を集めると須磨子の前借金には充分足りた。

須磨子は飛び立つやうに喜んだのである。少しでも內地へ近い南へ歸ることも、これからは自分自身の體であることも勿論嬉しかつたのだが、何よりも本居君に逢へる樂しさがあつた。

あれほど冷淡だつた本居君ではあるが、いつかの散歩の時を考へると、今彼逢へば——といふ希望は充分に持てた。それで須磨子も燥いだ。

愈々出發の日が來て、皆は手荷物の支度もでき、着更へして、店を出やうと云ふのに、須磨子の姿が見えなかつた。

須磨子なら、すつかり着更へして、二階へ上つたと云ふので、待ち兼ねたお玉が上つて行くと、客部屋の梁に、帶をつるして縊死して居た。

數分間前まで、あんなに燥いで、南への旅を喜んでゐた須磨子である。なぜ急に死ぬ氣

になつたのかお玉にも、誰にも想像がつかなかつた。

お玉達の三人は須磨子の小さな骨壺を携げて郭家店に來た。

そのときは、もう一切の金を使ひはたして居たので、わけを話して、郭家店の日本料理店で客分のやうにして働きながら蒙古軍の到着を待つて居たのであつた。

それで、軍隊が、停車場附近に到着したといふので、三人の女は、息せき切つて坂道を驅けあがつた。

『若林さんは』

お玉は、不安に驅られながら訊ねた。

『二三日、遲れて着くよ。』

大村君が一寸思案して斯う答へた。

塵埃にまみれた草原、疲れ切つた男達は倒れて居た。

『あとから行く、どの家だい。』

さう云つたが、女達は去りさうにもせず、泥まみれの草の上に、どろりと横になつた。

そのとき、丘の向ふのバプチャツプのテントから本居辰夫君が、とぼ〳〵と歸つて來た。

お玉はその姿を見たのである。

お玉は、待ちに待つた若林君の姿が見えないのでさつきから苛々して居た。

『ちえツ！』

舌打ちをすると、苦り切つて起ち上つた。

『本居さん、須磨子は死んだよ、縊つて死んだよ。』

本居君の顏に口を寄せて吐きだす樣に云つた。

『薄情なお前さんを怨んで死んだよ。お前さん、よくも太々しく生きて歸つたねえ。』

本居君は、ちらつとお玉の顏を見た。直ぐ顏を横向けて、對手にならず默々と去つて行つた。

『意氣地なし、青二才、手前が殺したも同じだよ。何とか挨拶しないのかい。』

お玉は本居君の背後から猛り立つた。

『馬鹿、調子に乘るない。本居にやあ、本居の考へがあつてやつたことだ。女のお前に、本居の心がわかるものか。』

大村君が、寢轉んだ儘、お玉を窘めた。

翌朝　眞夏の太陽は、今日も朝から照りつけて居た。

疲れ切つた蒙古兵は、かんかん照る朝日も、汗まみれの顏に集かる銀蠅の群も知らず、屍體のやうに草の上に倒れてゐた。

パブチャツブ將軍のテントでは、早朝から幹部會議が開かれて居た。

大村少尉が、日本人を代表して參加して居たが、間もなく歸つて來て日本人一同に報告した。

『將軍は戰ふ意志がないんだ。武器は不足だし、兵は疲れて居る。第一にこの陣形では絕對勝てる見込みはない。無理な戰爭をして兵を殺すより、寧ろ此際は涙を呑んで蒙古へ歸り、再擧を計らう。諸君とは此處でお別れしませう、と云つて男泣きに泣いとつたぜ。』

と云つた。

『それはパブチャツブの本心じやないぞ。守備隊に押し附けられたんだ。第一、芝居が見えすいてらあ。』

本居君は、眞蒼な頰をして居た。

『諸君とは此處でお別れしやう——さう云つたパブチャツブの心が君達にも解るだらう。將軍には日本人全體が御都合主義の裏切者に見へただらう。』

だれ一人、これに反對する者はなかつた。

『然し僕は違ふぞ、日本男子の名譽の爲に、何うするか見て居て呉れ。』

本居君はさう云つて、屹となつて立ち上つた。

本居君は蒙古服を着て、腰には大山氏から預つた月山彌五郎の日本刀を、サーベルのやうに作つて吊してゐた。

『何處へ行くんだ。』

大村君が肩を押へたが、本居君は振り切つて、栗毛の愛馬にひらりと跨り、拔刀を打ち振りながら、疾風のやうに、敵の陣地へ飛ひ込んで行つた。

瞬間に、本居君の姿は、前方の丘を越して見えなくなつた。

敵の前線に、がたがたと機關銃の音が烈しく響いたが瞬間にぴたつと止んだ。

『可愛さうに、やられたんだな。』

大村少尉は丘の彼方を見送つて云つた。

『女のあとを追つたんだ、この方が彼奴にはやつぱり眞實だつたかも知れない。』

銅色をした大村少尉の頰を、涙がはてしなく流れるのだつた。（終）

昭和十年十一月二十四日　印刷
昭和十年十一月二十八日　發行

戀の決死隊
定價十錢

（版權所有）

著者　濱本浩
發行兼印刷者　三井八智郎　東京市芝區櫻川町六番地
印刷所　文光社印刷所　東京市神田區須田町二ノ三

發行所　東京市芝區櫻川町六番地　第百書房　振替東京九〇七七番

取次並販賣所
東京鐵道局公認　鐵道保養會（鐵道各驛ホームスタンド一手販賣）
鐵道救濟會東京支部・鐵道授產會・森田書房
啓德社・上田屋・大阪新正堂

355
1105

## ◎刊行書目錄◎

（定價各冊十錢　送料二錢）

辰野九紫著　**萬引一代女**

新田義貞の後裔と稱する萬引女、しかも彼女は生活に何の不自由のない自分であり乍ら、デパートへ行くとフラ〳〵となつて手を出すといつた變質者、彼女と憲兵少佐とのいざこざ。現存人物の實話。

濱太浩著　**蒙古の幻**

滿洲獨立の裏に悟つた日本の志士が、彼地に稼いでゐる賣笑婦とのい熱戀も果し得ず彈丸にたほれて行く實話

中村正常著　**歳末人生挿話**

ユーモアーと風刺と筆者一流の明朗な笑ひをたゝへた面白い讀物。「適令ガール三人相」の一篇も加へてある。

近刊　**女の日記**

女給、ダンサー、女囚人、尼僧、末亡人、藝者、不良少女といつた女の赤裸々の生活を曝け出した秘文字……

**▼本社の讀物パンフレットの特長**　本社は毎月數冊づゝ實話、小說、其他一般讀物をパンフレットにして發刊します。各冊すべて讀み切りとして、三十分以內で讀まれるように、旅行の車中、通勤の電車內、僅かの休憩時間、一寸した退屈しのぎに、常にポケットに忍ばせてゐて便利なものとして各方面から御好評をうけて居ります。定價は十錢といふ廉價です。全國の驛賣店、新聞スタンド、有名書店で發賣してゐます。直接購讀の便宜もあります。

**▼御注文は**　すべて前金にて本社直接に願ひます。代金は振替貯金又は郵便切手にて定價に送料を添へて御申込み下さい。

東京市芝區櫻川町六
振替東京九〇七七番
第百書房

終